

『日本百名山の伝説と神話山』(九一)

大峰山のはなし

「最高峰八経ヶ岳と蔵王権現湧出の山上ヶ岳」

▼【大峰山とは】

大峰山脈は、奈良県の吉野から和歌山県の熊野まで一七〇キロの山々連なる大山脈。サクラで有名な吉野も大峰山（おおみねさん）の一部です。中心は山上ヶ岳（さんじょうがたけ）で、最高峰は八剣山（八経ヶ岳、八経ヶ岳）。そのほか大普賢岳（だいふげんだけ）、弥山（みせん）、稲村ヶ岳（いなむらがたけ）、大天上ヶ岳など、一二〇〇mを超える峰々が五〇座も連なっています。開山は飛鳥時代の白鳳年間（六七二〜六八六）、役行者小角（えんのぎょうじやおづぬ）によりなされたと言われています。

大峰山中には山伏たちがお参りして歩く場所（行所）が七五ヶ所あり、七十五靡（なびき）と呼んでいます。七十五靡を巡るにも順序があり、熊野から吉野への入峰（にゅうぶ）を「順峰」（じゅんぶ）、その反対を「逆峰」（ぎやくぶ）というそうです。



七十五靡の番号も、熊野本宮が第一番で、八経ヶ岳（第五一番）、弥山（第五四番）、山上ヶ岳（第六七番）などを経て、吉野蔵王堂が第七三番、最後は柳の宿の第七五番になっています。

この山はいまだに女人禁制が守られ、吉野金峰神社から山上ヶ岳への途中には「女人結界門」があり、そこから先へは入れないとの看板も建っています。

す。

▼【吉野】

今回は逆峰になりますが、吉野から入り、主だったピークをたどってみます。吉野といえば金峰山（きんぷせん）蔵王堂です。蔵王堂はすでに奈良時代には建てられていたといえます。役行者が山上で厳しい修行の末、有名な蔵王権現が湧出しました。そこを山上ヶ岳と名づけ、蔵王堂（山上蔵王堂・金峯山寺本堂）が建てられました。

それに対して、吉野金峰山寺の山ろくの山下（さんげ）にも山下蔵王堂を建てました。これがいまの金峰山蔵王堂なのだそうです。役行者は、山上で感得した蔵王権現の像をサクラの木に刻んで蔵王堂に納めました。それからというものの、サクラがご神木になり、金峰山寺にお参りにくる人たちは、皆苗を持ってきて植えて行く習慣ができたといえます。



それが次第に増え、いつしか吉野中がサクラの木で埋まり、毎年春になると、吉野山が全山サクラの花が咲き乱れます。とくに奥千本地区から、蔵王堂などある中千本、下千本方面を見下ろした景色は、まるで夢を見ているようです。そのサクラに惹かれ、昔から文人墨客がたくさん訪れました。西行法師もそのひとりで、その庵が奥千本にあります。また奥千本の吉野寄りには、金峰神社や「義経隠れ塔」もあります。

▼【山上ヶ岳】

役行者が蔵王権現を湧出した山上にある山上ヶ岳は、奈良県天川村（てんかわむら）にあります。山上ヶ岳は大峰山の中心なので、単に大峰山、大峰、金峰山などともいうそうです。七十五靡（なびき）の第六七番目の行所です。頂上には大峰山寺の本堂（蔵王堂）と寺務所、絵馬堂が建ち、一段低い台地

に護持院の参籠所(宿坊)があります。いまもつづく女人禁制の中心地で、登山口の清浄大橋、五番関、阿弥陀ヶ森、レンゲ辻には女人結界門が建っています。

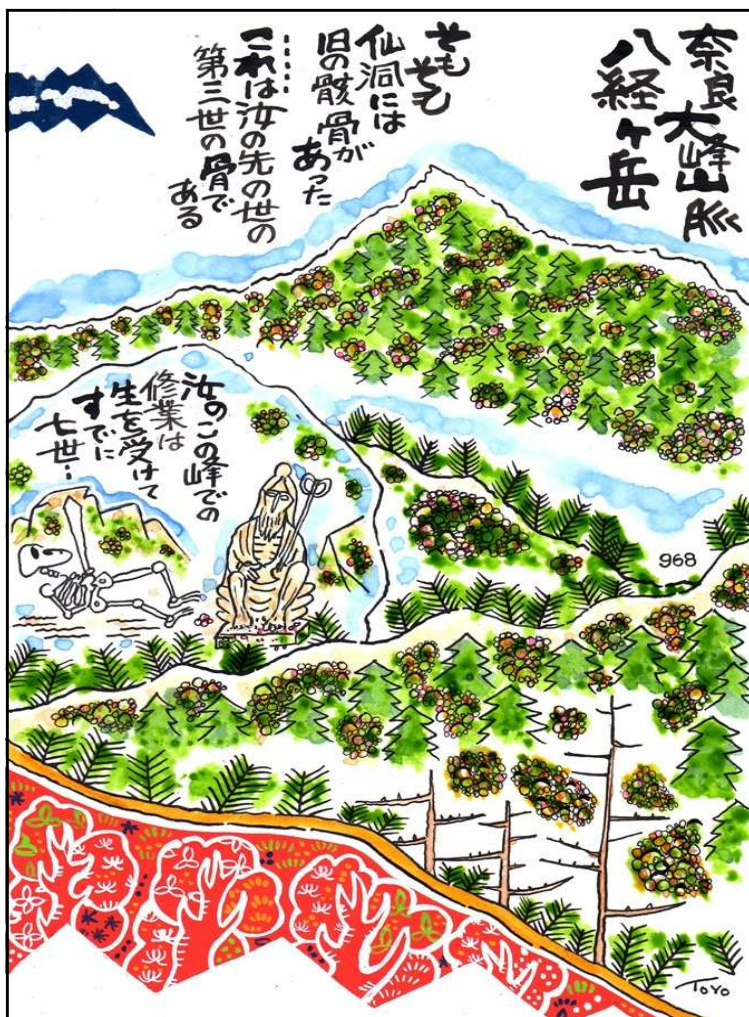
▼【行者還岳】

さらに南下すると行者還岳(ぎょう

す。

▼【弥山】

行者還岳から川迫川溪谷(かわさこがわけいこく)の源流を回り込んで弥山(みせん)に着きます。七十五摩の第五四番目の霊場です。山頂は樹林に囲まれた広場に弥山神社が鎮座してい



じやがえりだけ)に着きます。第五八番目の摩(なびき)で南面は大岩峰になつています。大絶壁は難所中の難所。役行者(えんのぎょうじや)でさえ登坂をあきらめて引き返し、東の肩をまわつて南へ下つたといひます。七十五摩(なびき)の第五八番目に当たりま

て、北東の坪内集落の天河弁財天(てんかわべんざいてん)の奥宮になつています。ここも明治の「神仏分離令」で、天神社と改称させられました。祭神も弁天さまから市杵島姫命(いちぢまひめのみこと)などに換えられました。

しかし民衆は、お上が勝手に決めたそんなことにはおかまいなく、いまでも日本三弁天のひとつとして崇敬しています。山頂には小池があつて、その昔、役行者が大峰山を開山したとき出現した弁財天の池なのだそう。その水は、先達(せんだつ)が汲んでから参詣にきた信者が受ける掬になつていそう。もし信者が勝手に、池の霊水に手を入れたりすると、たちまち水は干上がつてしまふそうです。

▼【最高峰八経ヶ岳】

弥山から三〇分も南下すると、大峰山脈最高峰の八経ヶ岳(はつきやうがたけ)です。八経ヶ岳とか、八剣山、八剣岳とも呼ばれています。標高は一九一四・九mで、近畿地方の最高峰。七十五摩の第五一番に数えられています。この山は、役行者が「法華経」八巻を埋めたところといひ、修験道の石碑がたくさん建っています。江戸時代には「明星ヶ岳」の名で呼ばれ、いまのように八経ヶ岳というよになつたのは明治以降のことだそう。その名残がこの山の南方にある明星ヶ岳で、明星ヶ岳は第五〇番の行場として残っています。

▼【釈迦ヶ岳】

七十五摩の第四〇番の行所が釈迦ヶ岳(しゃかがたけ)です。転法輪岳(てんぽうりんだけ)とも、単に大峰とも

呼ばれます。この山はかつて、釈迦如来が説法をしたといわれる、インドの霊鷲山(りょうじゆせん)と檀特山(だんとくさん)が、人々を救うためにこの地に飛んできたという伝説があります。そのため釈迦如来をまつたのでその名があるそうです。山頂には銅製の釈迦如来像が建っています。これは強力な岡田雅行という人が運びあげたものだそうです。釈迦ヶ岳から南へ一時間、「太古の辻」から東に下ると「前鬼の里」という集落があります。

▼【女人禁制】

さて、いまだに大峰山につづいている「女人禁制」にはこんなエピソードがあります。かつて、アメリカの進駐軍女性が、ここに登ろうとしたことがありました。警察から「国際問題になるので、女性たちの登山を止めたりしないように」とのお達しです。しかし、住民はそれにも耳をかさず、男性三〇〇人を召集して進駐軍女性たちを通せんぼ。「この山は、アメリカの尼僧院と同じ場所。尼僧院だって男性が入れば混乱するでしょう」と、相手を納得させたといひます。

しかし、女人禁制の大峰山も入っている『日本百名山』を完登した女性が多い。それもそのはず、以前から登っている女性もいるらしいのです。記録にあるだけでも、昭和四年(一九二九)の山開きに女性二人が登っています。

昭和五年（一九三〇）発行の雑誌「山岳旅行案内 昭和五年版」（野球界社発行）の「山上岳」の記事に「往古より女人禁制の山であったが、昨夏二人の女性に山頂を征服せられてしまった」と報じています。

また「昭和十二年（一九三七）九月と十一月の二回、女性を伴い登山決行」という記事が、昭和二十六年（一九五一）の「山と溪谷」一四八号の特集「新稿 山岳辞典」（一七回）にも掲載されています。

一方、牧田満政氏という人が、一九五六年（昭和三一）に発表した「大峰山に登った女性」という文書には、次のような関西の山岳会主宰者からの手紙を披露しています。「今更登山の見地からならば、女性登山など問題じゃない……。ただし、昭和五年（一九三〇）の女性二人の他は、女性が入山したのは、総て開山期以外、もしくは、行者路以外である。開山期に無理に女性が押し入ろうとすれば、頑迷固陋（ころう）の地元民の性格を知らないで無理強いするのは無謀であり、傷害事件に発展する可能性もある」と述べています。時代が大きく変わったいま、いつまで女人禁制が守れるか興味のあるところでは。

▼【吉野・源義経隠れ塔】

金峰山神社のそばには、源義経ゆか

りの隠れ堂があります。一一八五年（文治元）、義経は壇ノ浦の戦いで平氏を滅ぼしたのち、兄の源頼朝と対立することになります。義経は後白河院から鎌倉追討の院宣を得ますが、大半の武士は知らんぷり。鎌倉の頼朝は逆に義経追討の院宣を貰い義経を討ちに向かいます。義経は兵庫県の大物（だいもつ）の浜から乗船、九州を目指します。

しかし、突然の突風で船は難破、九州行をあきらめたため、仲間たちは逃げ去ってしまいました。その時、義経についてきたのは武蔵坊弁慶と静御前などたった四人だったということです（『吾妻鏡』）。その後天王寺から吉野山に、愛妾の静御前や武蔵坊弁慶らとともに逃れ来て、吉野へ籠ります。ここでも、衆徒（僧兵）が源義経一行の搜索に乗り出したという情報が入ります。

身の危険を感じた源義経一行は、山伏姿になって、吉野山からの脱出を図ります。しかし大峰山は女人禁制（きんせい）、一緒に行くわけにはいきません。そこで静御前に相当の金銀を与えて、京に行くように供の者たちに命じました。そして自分たちは、吉野からさらに南東へ入っていく、大峰山（いまの奈良県吉野郡天川村付近）に向かいました。

ところが供の者たちは、金銀を奪つ

て静御前を金峯山の雪の中に置き去りにしてしまつたのです。静御前は山中をさまよい歩いた末、いつの間にか蔵王堂にたどり着き助けられます。そして、金峯山寺の僧坊・吉水院（吉水神社）で五日間かくまわれたました。しかしのち、京に送られ、また鎌倉の頼朝のもとへ送られ尋問を受けることに

摘みに行かせました。すると静御前の霊があらわれ、お経を書いて回向（えこう）をしてくれるように頼みます。女性が神職にことの次第を話していると、突然、霊が女性に乗り移り、自分は静御前だと名乗ります。

神職が神社宝蔵の「舞い衣装」を女



なります。そして鶴岡八幡宮の神前で、有名な静御前の舞が行われます。

その静御前については、謡曲『吉野静』『二人静』や浄瑠璃『義経千本桜』になって残っています。『二人静』の物語の内容です。ある年の正月七日、吉野の勝手明神の神職が女性に若菜を

性に着せると、女性は舞いだしました。やがて亡霊も姿をあらわし、二人になつて舞いはじめました。「しづやしづ、賤（しづ）の草環（おだまき）繰り返し、昔を今になすよしもがな」。春に吉野で楽しく過ごした義経との昔語りをフタリシズカとなつて謡いあげいくというストーリーです。

またこの話は「ヒトリシズカ」、「フタリシズカ」という野草(センリョウ科)の名前になっても残っています。江戸中期初頭みら寺島良安『和漢三才図会』に「ヒトリシズカ・静とは源義経の寵妾。吉野山で歌舞したという故事がある。好事家はこの花の美しさをそれにとえてこう名づけている」とありま

▼【吉野のツチノコ伝説】

吉野の上千本、奥千本から金峰神社、その奥の金峰山といわれる地域の最高峰に青根ヶ峰(あおねがみね)があります。少し先の林道を左折、音無川沿いに下っていくと蜻蛉(せいらい)の滝があります。この滝はいまは蜻蛉の滝といっていますが古くは清明の滝といい、奇岩・漢水が見物で松尾芭蕉も訪れたところ。むかしはツチノコ(野槌蛇)がよく見かけたという場所です。

ツチノコは野槌蛇(のづちへび)ともいって、一時話題になった奇妙な形をしたあれです。江戸時代の百科事典『和漢三才図会』(わかんさんさいずえ)には「大きいものは直径五寸(一五センチ位)、長さ三尺(九〇センチ位)。……和州(やまと)の吉野山中

の菜摘川(なつみがわ)(いまの吉野町大字菜摘あたりの吉野川)、清明の滝(いまの蜻蛉の滝)辺りで往々にこれを見かける。口は大きくて人の脚に噛みつく。坂を走り下って大変速く人を追いかける。ただし、登りは極めて遅い。それで、この蛇に逢えば急いで高い処へ登れば、追ってはこない」と出ています。

その蜻蛉の滝のわきの岩上には弁天堂があり、また付近の不動堂には不動明王と役行者の像が安置してあります。いまはこの滝の近くまでバス道路が通り、あたりに県民グラウンドまでできてしまいうにぎやかさ。滝のまわりを一周する遊歩道もあります。滝はさすがに文人墨客が好んで訪れただけあって幽閉なところで、水量も多く水しぶきがすごい。滝下を渡るにちよっと勇気が要るくらいでした。

▼【役行者伝説】

大峰山は開山者の役行者に関係した事柄があまりに多く、峰々のいたる所に行者の石像が建っています。行者の本名は役小角(えんのおづぬ)。修験道の開祖とされ、全国八〇数座の山々を開いたと伝えられています。飛鳥時代の六三四年、いまの奈良県御所市茅原(ちばら)の吉祥草寺で生まれたとされています。役ノ公(えんのきみ)、役優婆塞(えんのうばそく)、小角仙人などとも呼ばれています。

子どもの時から神童といわれ、一三歳のころから、葛城山(いまの金剛山)に入り、三二歳の時、葛城山に籠もって山岳修行。ついに思いのままに行動できる呪術(じゅじゅつ)を得たとい

「神仙伝」という本には、役行者は仙人として、三七人中、五番目にあげています。江戸後期になると朝廷から「神変大菩薩」の称号が送られ、いま山上ヶ岳大峰山寺わきに「神変大菩薩壹千貳百年御遠忌」の像が建っています。

▼【前鬼・後鬼伝説】

各地の役ノ行者の像のかたわらに



子に告げ口をします。それを信じた朝廷は役行者を捕まえて伊豆の大島に流しました。

その後何年かして奈良へ帰った行者は、母親を鉢に乗せ唐の国へ飛び立つたといわれています。そんなことから『本朝

は、必ずといっているほど二匹の鬼がついています。この鬼たちは前鬼(ぜんき)と後鬼(ごき)というそうです。前鬼の方は赤目で斧(おの)を持ち、後鬼は黄色い口をしていて、二匹は夫婦だとも、兄弟だともいっています。夫婦鬼の説では、酒を飲んで酔っぱら

い、目を赤くして歌を歌う夫鬼を、黄色い口を開けた女房鬼が、笑いながらみている姿をあらわしているのだとのこと。この鬼たちはもともと、大阪府と奈良県の境にある生駒山（いこまやま）という山にすんでいて、山越えをして通る旅人を襲っていた盗賊だとの説もあります。

役ノ行者が一六歳の時（異説あり）、近くの信貴山（しぎさん）で修行をしていました。すると、身の丈三mもあるような、牙を生やした二匹の鬼が邪魔をします。怒った行者は、空を飛んで鬼を追いかけて、生駒山南東の奈良県側で捕まえました（いまの生駒市鬼取の里）。そして、南西の大阪側まで引きずっていき、髪を切って（いまの東大阪市かみ切りの里）、妖力をなくします。いま、それぞれの場所に鬼取山鶴林寺、髪切り山慈光寺というお寺もあります。こうして折伏（しやくぶく・悪を打ち砕き迷いを覚まさせること）された鬼たちは、行者の忠実な従者となったということです。

▼【前鬼の里】

この二匹の鬼はその後、行者の遺言で大峰山の修行の場をまもるため、吉野と熊野の境に「前鬼の里」を開き、天狗となって山をまもり続けていると伝えます。その子孫は、江戸時代までに五つの家に分かれ、鬼熊、鬼上、鬼継、鬼助、鬼童の姓を名のり、まとめ

て「五鬼」と称していたということですが。いまも前鬼の里には、大峰山で修行をする行者や登山者たちのための坊（ぼう・宿泊所）があります。

▼【洞川竜泉寺の伝説】

さて山上ヶ岳から洞辻茶屋（どろつじちやや）分岐で洞川（どろかわ）集落へ下りると大峰山竜泉寺というお寺があります。ここは山上ヶ岳への入峰者は必ずこの竜泉寺で水行したという所。ここには寺創建に関わる伝説があります。ずっと昔の話です。村はずれに茂助という身寄りのない若者が住んでいました。

村人茂助はある日、古池のそばで苦しむ若い女性を助け、のち二人は結婚。やがて子供が産まれましたが、女性は自分の正体の白蛇姿を見られてしまいました。赤子に片目を残し池に帰っていき、赤子は母親の目玉をなめながら育ちましたが、やがて目玉も小さくなりなくなりました。茂助は泣く赤ん坊をあやし、さまよい歩きました。すると、池の水がざわめき、片目の母親の白蛇が姿をあらわしました。

「残っているもうひとつの目玉をなめさせて下さい。でもこれからは昼夜が分からなくなってしまうので、朝三つ、夜六つの鐘を鳴らして下さい」。母親は池の底に姿をかくしました。茂

助は感動し、妻への仏の加護を願うため竜泉寺のお寺を建立したといいます。境内にある竜王堂の鐘楼からは、いまも朝は三つ、夜は六つの鐘の音が、大峰山ろくに響いています。

▼【七たび生まれ変わった伝説】

大峰山脈最高峰の八経ヶ岳は「八剣山」ともいいます。ここには役行者が亡くなってまた生まれ変わったことを示す、前世の遺骨が残っているといえます。室町時代以降の成立といわれる『役行者本記』という本の「第三小角の奇特の部 その一」に次のようなことが載っています。天智六年（六六七）の四月、役行者小角が三四歳の時、はじめてここ大峰山に登り、剣の峰（八剣山、八経ヶ岳）まで行きました。

呪という呪文を三度唱えてから独鈷杵（とっこしよ）と宝剣を取ってみよ」との声が聞こえました。

小角が呪文を唱えると、骸骨は手を開いて持ち物を小角に渡しました。小角はこれを大事にして一生身から離さなかつたといえます。それから西向野（小笹）に行くと、別の骸骨がありました。それは第六生の遺骸でした。また釈迦ヶ岳にも一体の遺骸があり、それは第五生のものでした。

そこに一体の骸骨が横たわっていました。それは左手に独鈷杵（とっこしよ）を持ち、右手には利剣（りけん・邪悪なものを打ち破る剣）を持って、上を向いて横たわっています。小角がそれを取ろうと力を入れると、山がゆれ動きました。持ちものはとれませんが、行者は修行の力が足りないのかと、天に祈りさらに苦しい修行をつづけました。疲れ果て気絶していると、「小角よ。汝はこの峰において一生を終わること七度である。ここにあるのはその第三生の遺骸である。まだこの峰にはほかに二生の遺骸がある。千手の呪（千手観音の陀羅尼呪）を五度と、化

第一生は、遠く允恭天皇（いんぎょうてんのう・四一二〜四五三）の時代から、第七世である現在の天智六年（六六七）に生まれ変わって、ついに経歴の功が果たされたのだということですが。これと同じようなことが鎌倉時代の本や、江戸中期のものにも記載されています。修行を完成するには七世もの期間かかるんですね。

▼【参考文献】

・「あしなかな三・第五三輯」（山村民俗の会発行）一九五六年（昭和三一）
・『吾妻鏡』：岩波文庫『吾妻鏡』（一）龍（りょう） 肅（すすむ） 訳注（岩波書店）一九九七年（平成九）
・『役行者伝記集成』銭谷武平（東方出版）一九九四年（平成六）
・『角川日本地名大辞典二九・奈良県』永島福太郎ほか編（角川書店）一九九

○年（平成二）

・『義経記』（日本古典文学大系三七）
岡見政雄校注（岩波書店）一九五九年
（昭和三四）

・『古代山岳信仰遺跡の研究』大和久
震平著（名著出版）一九九〇年（平成
二）

・『山岳宗教史研究叢書一八』（修験道
史料集二）五来重（こらいしげる）編
（名著出版）一九八四年（昭和五九）

・『新日本山岳誌』日本山岳会（ナカ
ニシヤ出版）二〇〇五年（平成一七）

・『仙人の研究』知切光歳著（大陸書
房）一九八九年（昭和六四・平成一）

・『日本山岳ルーツ大辞典』村石利夫
（竹書房）一九九七年（平成九）

・『日本三百名山』毎日新聞社編（毎
日新聞社）一九九七年（平成九）

・『日本山名事典』徳久球雄ほか（三
省堂）二〇〇四年（平成一六）

・『日本伝奇伝説大事典』乾克己ほか
編（角川書店）一九九〇年（平成二）

・『日本霊異記』…中田祝夫校注・訳
「日本霊異記」日本古典文学全集・第
六卷（小学館）一九九三年（平成五）

・『日本歴史地名大系三〇・奈良県の
地名』（平凡社）一九八一年（昭和五
六）

・『本朝神仙伝』大江匡房著・日本古
典全書・古本説話集 川口久雄・校注
（朝日新聞社）一九七一年（昭和四六）

・『名山の日本史』高橋千劔破（ちは
や）（河出書房新社）二〇〇四年（平
成一六）

・『和漢三才図会一二』寺島良安…（東
洋文庫四九八）（島田勇雄ほか訳）（平
凡社）一九八九年（昭和六四・平成一）